

II-1. 調査と研究

飛鳥藤原京の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1997年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡4件、藤原京跡3件、飛鳥地域5件で、いずれも諸々の工事に対する事前調査である。本年度の学術調査は、桜井市教育委員会と協同で実施した吉備池廃寺第2次調査1件のみである。従前に較べ藤原宮・京跡の調査件数が少ないのは、開発事業の減少とも多少関係するが、飛鳥池遺跡に計画され、平成11年秋完成予定の万葉ミュージアム建設に伴う調査に総力をつぎ込まねばならない事情があったからに他ならない。

藤原宮跡では、第85次調査として西方官衙南地区、第83-7・14次調査として内裏南辺地域の調査を実施した。西方官衙地区は、遺構の稀薄な地域で今次の調査でも7世紀後半の掘立柱建物1棟を検出したにすぎない。同地域の下層は、県内でも有数な弥生時代の大規模集落跡である四分遺跡であり、今回も一部、下層遺構の検出を試みた結果、中期の環壕、中期末の墓葬を確認した。なかでも中期末の墓葬は、戦禍などで不慮の死を遂げた男女二体を同時に土葬したもので、当時の社会情勢や近畿地方人に関する貴重な知見が得られた。

第83-7次調査では、内裏内郭の南を囲う掘立柱塀や大極殿北側で確認した宮造営時の運河SD1901Aの延長部を確認した。また、第83-14次調査では、前述の内裏内郭の南の塀の南雨落溝を検出している。内裏内郭塀は醍醐池の岸からかなり離れた池底で確認しており、内裏中樞部の存在が予想される池底でも、深く掘られた柱穴の場合には、残存している可能性が考えられ、池底を調査する必要性を実感した次第である。

藤原京跡では、第88次調査として、本業師寺の南西、右京九条三坊・四坊の調査を実施し、西三坊大路関連の遺構を検出した。その他の藤原京の調査は小規模であり、かつ周辺部の状況も明らかになっていないので省略する。

飛鳥寺地域では、飛鳥寺寺域内で2箇所、飛鳥池遺跡で2箇所（第84・87次）、飛鳥池東方で1箇所（第86次）で調査を実施した。飛鳥寺の南西部で実施した第83-1次調査では、従前検出の石敷広場と一連と考えられる石敷、北辺で実施した第83-2次調査では、伽藍方位に一致する掘立柱建物を検出している。

第84・86・87次調査は、万葉ミュージアム建設に伴う事前調査である。第84次調査区は、飛鳥池の北、飛鳥寺東南部にあたり、前年度より引き続き調査を進め、宮期の遺構が稀薄な南辺地域、ならびに北辺の道路遺構周辺の下層遺構の確認を主目的に実施した。南辺部では、新たに方形池、両側に溝を配す掘立柱塀、踏石遺構等を検出。塀の両側の溝からは、天武期にさかのぼる紀年木簡、飛鳥寺関連の木簡、大嘗祭等天皇家に係わる木簡等が出土した。溝の木削層はすべて持ち帰り、順次洗浄中であり、現在確認した木簡は、7,000点にのぼる。主要な木簡については、年報1998-IIに集録している。

第87次調査は、遺跡の発見の契機となった1991年の調査の南、旧池南汀から丘陵斜面を対象に実施した。谷を埋め籬段状に造成した工房跡、炉跡、掘立柱の倉庫等、飛鳥池工房の実務部内に関する遺構、遺物、また工房全体を区画する大規模な掘立柱塀を検出。出土物には、従前知られていた漆関係・ガラス・銅・鉄製品鋳造関係遺物の他、水晶・コハク玉、金・銀製品の鋳造を物語る遺物が出土し、宝飾品全般を製造する総合的一大工房跡と判明する。

第86次調査は、飛鳥池東の谷部を対象に、この地域の土地利用状況の確認を主眼に、谷全域にトレンチを設定して調査を進めた。この地域も7世紀中頃にはすでに開発されており、西側の丘陵寄りにこの地域の基幹水路となる大溝を、その東側には、掘立柱塀で区画された大規模な建物等の存在を明らかにした。

舒明天皇発願の百済大寺と目される吉備池廃寺第2次調査（第89次）は、金堂西側に存在する土壇の性格解明と伽藍の範囲確認を目的に実施した。西側の基壇は稀にみる規

模の塔跡であることを確認。また南面回廊も検出し、当伽藍は最古の法隆寺式伽藍配置の可能性が高まった。

(巽淳一郎)

(現地説明会) 4月27日 飛鳥藤原第84次 (飛鳥寺東南部) 島田敏男
3月14日 飛鳥藤原第89次 (吉備池廃寺) 佐川正敏